

親おやを夢ゆめむ

細井平洲ほそい へいしゅう

芳草ほうそう萋萋せいせいとしていちにちいちあら日日新にちにちあらとなり

人も動うごかしてひと帰思きし春はるに勝かえす

郷関きまつかん此こゝも去さるさんぜん 三千里さんぜんり

昨夢さくむ高堂こうどう老親ろうしんにに 詢えつす

【作者】細井平洲(一七二八〜一八〇一年)江戸中期の儒者。尾張(愛知県)知多郡平洲(ひらしま)村の出身。姓はもと紀(き)と称し紀

平洲(きのへいしゅう)ともよぼる。名は徳民(とくみん)、字は世馨(せいけい)、通称甚三郎、平洲または如来(によらい)山人と号す。はじめ中西淡洲に学びのち長崎に出て華音(かおん)中国語を習うこと三年、母の病により帰郷。二四歳名古屋で塾を開いたが、間もなく江戸に出る。師淡洲(たんえん)の歿後、叢桂(そうけい)社の門弟も引取り名声一時に上がる。尾州侯の儒官となり米沢藩上杉鷹山(ようざん)藩主の賓師(ひんし)ともなる。人となり風流温雅度量にとみ、小事に拘泥(こうでい)せず、享和元年(一八〇一)六月江戸尾州藩邸において没す、七四歳。

【語釈】*芳草…香のよい草 *萋萋…草のしげつたさま *歸思…帰心 故郷へ帰りたいと思うころ

*不勝春…春の物思いにたえられない *高堂…りつばな家の意であるが 父母の住居を敬つていった

【通釈】芳しい草が勢いよく伸び一日一日と成長してゆく様子は、人の心を動かし家に帰りたい気持ちが起こって、春の物思いにたえられず、いてもたってもおられない。郷里は遥かに遠く帰ることも出来ない。昨夜夢で年老いた両親に会って元気な姿を見ることが出来、嬉しいことだった。